

長引く裁判「つらい」父、涙浮かべ「不満」... 女児殺害 差し戻し

広島市の小学1年、木下あいりちゃん(当時7歳)が殺害された事件で殺人などの罪に問われたホセマヌエル・トレス・ヤギ被告(37)の上告審で、最高裁は16日、広島高裁での審理のやり直しを命じた。「迅速審理」を掲げて始まった裁判が、裁判のあり方を巡って長期化する皮肉な展開に、遺族は「裁判が今後も続くと思うとつらい」とやるせなさを漂わせ、検察官からも「申し訳ない」という声が漏れた。



最高裁での上告審判決後、娘のあいりさんの写真を前に記者会見に臨む父親の木下健一さん(16日午後4時48分、東京・霞が関で) = 川口正峰撮影

広島小1女児殺害事件
裁判の流れ

上告審・最高裁 (2009年10月16日)	「審判員が採用しなかったことは審理不 尽と言えない」として控訴審判決を破棄
被告が上告	差し戻し
控訴審・広島高裁 (2008年12月9日)	「審判員が場所特定の可能性のある調書を 採用せず審理不実」として1審判決を破棄
被告、検察が控訴	
1審・広島地裁 (2006年7月4日)	「卑劣な犯行だが、計画性はない」として ヤギ被告に無期懲役の判決

判決を受け、午後4時過ぎから東京・霞が関で開かれた記者会見。あいりちゃんの父、建一さん(42)は「裁判自体が複雑になり長引いてしまった。不満はある」と心境を吐露した。この日の判決は、傍聴席の最前列で傍聴したが、「最高裁は殺害場所を特定しなくても良いと言っているようで、真実を知りたいと思う私たち遺族にとっては非常に残念だ」と話した。

その上で、「被告は『謝りたい』などと言うが、公判で黙秘をした
り、ウソをついたりしている。心を入れ替えて、真実を話してほしい」と述べ、裁判所には「事件がいかに悪質かもう一度見直し
て、極刑の判断をしてほしい」と、時折、目尻に涙を浮かべて訴えた。

検察側は、池上政幸・最高検公判部長が「差し戻し審での主張立証に万全を期したい」とコメント。検察内部には「1審の立証
方法には反省すべき点がある」との声があり、ある幹部は「結果的に裁判に時間がかかってしまい、遺族には申し訳ない」と話
した。

弁護側は判決評価 一方、弁護人の井上明彦弁護士は広島市内の広島弁護士会館で取材に応じ、判決について、「当たり前
のことを当たり前述べて判決。検察官のミスを裁判所が救ってやることはないということであり、まさにその通りだと思う」と評
価した。

(2009年10月17日 読売新聞)